



原 秀樹 [はら ひでき]

ジャパンファウンデーション・ニューヨーク事務所職員

JF職員が感じたアメリカ

マンハッタン緊急救命室へようこそ!

「ER（緊急救命室）」というテレビドラマをご存じだろうか。病院を舞台にした人気番組だが、若き医師たちの壮絶な仕事ぶりを彼らの葛藤とともに描き出したドラマは私のお気に入りの番組のひとつであった。ただし、自分がそこに運ばれるまでは……。

その日は凍てつく夜だった。仕事を終え家路に向かう私は氷に足を取られ、地下鉄の階段を顔面から真っ逆さまに滑り落ちてしまった。意識がもうろうとするなか、通りがかりの人が私を助け起こし、救急車を呼んでくれた。顔面から滝のように血が流れているのを見て、ハンカチやティッシュをそっと渡してくれる人もいた。

病院に運ばれた私は早速担架でERに運ばれた。痛みとは裏腹に、「実際のERはどんなところだろう」と期待に胸がふくらむ。運ばれたのは古びた部屋。唸っているけが人が4~5人いた。スタッフらしき人間はカウンターの向こうに3人ほどいるが、中華の出前を食べてお喋りに夢中だ。いくら待っても誰一人として手当てされる気配はない。

そうか、あのスタッフは事務職で、ドラマで見たような「若き医師」は、間もなくあの階段から颯爽と駆け降りて来るに違いない……。とっていた矢先、食事を堪能したスタッフの一人がやおら立ち上がり私のほうに近寄ってきて、「で、どうしたの?」と言うではないか。

「せめて手ぐらい洗えよ」と言いたいのを我慢し

て事情を説明すると、彼は傷口を消毒し折れた鼻に絆創膏を貼って「That's it.」「え、それだけ?」と思っていると、「顔の血はあそこで洗えばいい」と指さしたのは、さっきのデリバリーボーイが帰りに出前袋を洗っていた洗面台。うっ、と思いつつも、「いや、もう血はいいから、悪いけど、タクシーを呼んでくれないか」と尋ねた私に放たれたとどめの一言。「タクシーなら2ブロック先までいけばいくらでも流しているじゃないか」。

顔面血だらけで服も破れた人間に止まってくれるタクシーなんてあるわけないだろうが……。結局、頼み込んで外までついてきてもらい、ほどなく家にはたどり着いたのだが、私のERへの憧れはすでに微塵も残っていなかった。

あとで聞いたのだが、私が運ばれたのはマンハッタンでも院内HIV感染率の高さで有名な病院なのだそう。そういえば別のテレビドラマで、イーストサイドで事故にあった登場人物が救急車を呼ぶときに、「ルーズベルト病院に運んでくれ」とわざわざ街の反対側の病院名を指名していたのを見て不思議に思ったことがある。医療のレベルも管理態勢も病院ごとに恐ろしく差のあるアメリカでは、むしろ当然持っておくべき類の情報なのかもしれない。

しばらくして、同じERから電話があった。「鼻の手術はどこでしますか? うちでもできますけど」。私は即答した。「ルーズベルト病院でお願いします」。